

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、  
 天使軍爾墓現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか  
 番兵死し者如し、マリアは墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね  
 立爾潔體尋

たり。なんぢはぢごくにいざなわれず  
 爾地獄誘

して、ぢごくをとりにし、いのちをた賜  
 地獄虜生命賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。  
 者處女逢給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは  
 死復活主光榮

なんぢにきす。  
 爾歸

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
 使徒等同座者忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實神智の役者聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい  
 神撰笛愛

にみちた る う つ わ 、 わ が く に の こ う  
 満 器 我 國 光

しよ う しゃ 、 あ し と し ゆ き よ う せ い ニ コ ラ イ  
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 なん ぢ の ぼ く ぐ ん の た め 、 お よ び  
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い  
 全 世 界 爲 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。  
 三 者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ 子 お と せ い し ん に き  
 光 榮 父 子 聖 神 歸

す 、

せ い せ い しゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が  
 成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

く に なん ぢ を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け  
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 なん ぢ は は じ め わ が く に に お い て お の  
 爾 初 我 國 於 己

れ を が い ら い しゃ と し り た れ ど も 、 ハ リ ス ト ス の  
 外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことな し、かれらにか  
屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
恩 寵 與 教 會 建

たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
今 此 教 會 爲 祈

たまえ、けだしわれらそのしよしはなん  
給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
呼 我 善 牧 者 慶

べよ。

【 復活のコンダク 第6調 】

いまもいつもよよに、アミン。  
今 何 時 世 世

いのちのげんいたるハリストスかみはいのちを  
生 命 原 因 神 生 命

ほどこすてをもつてしせしものをくらきた  
施 手 以 死 者 暗 谷

によりいだして、ふくかつをじんるいに  
出 復 活 人 類

た ま え り 、 し ゅ う じ ん の き ゅ う せ い し ゅ 、 ふ  
 賜 衆 人 救 世 主 復  
 く か つ と い の ち 、 お よ び し ゅ う じ ん の か み な  
 活 生 命 及 衆 人 神  
 れ ば な り 。

司祭) ( 黙誦： <sup>せい かみ せいじゃ うち いこ</sup> 聖なる神、 <sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup> 聖者の中に息い、 <sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup> セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
<sup>さんえい ことごと てんぐん ふくはい ぼんぶつ む ゆう</sup> ヘルヴィムより讚榮せられ、 <sup>ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もるもろ たまもの もつ これ かざ</sup> 悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい</sup> 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup> を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
<sup>さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの</sup> る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup> なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup> 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
<sup>せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう</sup> を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生  
<sup>しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ</sup> 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) <sup>けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup> 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 勇 毅 聖

じょうせい のものよ、われらをあわれめ  
 常生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせい のものよ、われらをあわれ  
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせい のものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
 光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 歸 今 何 時 世 世

せいなるじょうせい のものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせい のものよ、われらを  
 毅 聖 常 生 者 我 等

あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ  
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 プロキメン 提綱 主日第6調 】

司祭) <sup>つつし き</sup> 慎みて聽くべし、<sup>しゅうじん へいあん</sup> 衆人に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>しゅ なんぢ たみ すく なんぢ ぎょう ふく くだ たま</sup> プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
主 爾 民 救 爾 業  
ふくをくだしたまえ。  
福 降 給

誦經) <sup>しゅ われなんぢ よ われ かため わ たため もだ なか</sup> 主よ、我爾に呼ぶ、私の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
主 爾 民 救 爾 業  
ふくをくだしたまえ。  
福 降 給

誦經) <sup>しゅ なんぢ たみ すく</sup> 主よ、爾の民を救い、

なんぢのぎょうにふくをくだしたまえ。  
爾 業 福 降 給

【 アポストロス 使徒經 220 端 エフェス書2章4節~10節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと じん たつ しょ よみ</sup> 聖使徒パウエルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい あわれみ と かみ そのわれら あい おおい あい よ われらつみ よ し</sup> 兄弟よ、矜恤に富める神は、其我等を愛する大なる愛に縁りて、我等罪に由りて死

<sup>もの</sup> せし者をハリストスと<sup>とも い</sup> 偕に生かせり、<sup>なんぢらおんちよう もつ すく</sup> 爾等恩寵を以て救われたり、<sup>かれ とも ふくかつ</sup> 彼と偕に復活せ  
 しめ、<sup>あ てん ざ</sup> ハリストス・イイススに在りて天に坐せしめたり、<sup>みらい よ おい その</sup> 未来の世に於て、其ハリストス・イ  
 イススに在りて我等に<sup>あ われら ほどこ</sup> 施しし<sup>じんじ もつ</sup> 仁慈を以て、<sup>おんちよう あふ</sup> 恩寵の溢れたる<sup>とみ しめ</sup> 富を示さん<sup>ため</sup> 爲なり。<sup>けだし</sup> 蓋  
<sup>なんぢら おんちよう もつ しん よ すく</sup> 爾等は恩寵を以て信に由りて救われたり、<sup>こ なんぢら よ あら</sup> 是れ爾等に由るに非ず、<sup>かみ たまもの</sup> 神の賜なり、  
<sup>おこない よ</sup> 行に由るに非ず、<sup>あら ひと ほこ</sup> 人の誇る<sup>ため</sup> ことなからん爲なり。<sup>けだしわれら</sup> 蓋我等は彼の<sup>かれ つく</sup> 造りし<sup>もの</sup> 者にして、ハ  
 リストス・イイススに在りて<sup>あ よ わざ</sup> 善き功の爲に<sup>ため つく</sup> 造られたり、<sup>すなわちかみ われら</sup> 即神が我等の<sup>おこな</sup> 行<sup>ため</sup> わん爲に、  
<sup>あらかじ</sup> 預め<sup>そな</sup> 備えし<sup>ところ</sup> 所なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をも  
 って、罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし——あなたがたの救われたのは、  
 恵みによるのである——キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さ  
 ったのである。それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な  
 富を、きたるべき世々に示すためであった。あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によ  
 るのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるの  
 ではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。わたしたちは神の作品であって、良い行いを  
 するように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を  
 過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 主日第6調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>しじょうしゃ おおい</sup> 至上者の覆<sup>した</sup>の下に居る者は、<sup>おもの</sup> 全能者の<sup>ぜんのうしゃ</sup> 蔭<sup>かげ</sup>の下に安んず、<sup>した やす</sup>



誦經) <sup>しゅ い なんぢ われ かくれが われ ふせぎ われ たの ところ われ かみ</sup> 主に謂う、爾は我の避所、我の防禦、我が頼む所の我の神なりと、



司祭) ( <sup>ひと あい しゅさい わ ころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し</sup> 黙誦：人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思

<sup>ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ</sup> を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

<sup>ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 <sup>エヴァンゲリオン</sup> 福音經 ルカ福音書66端 12章16~21節 】

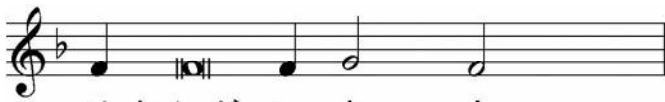
司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> ルカ傳の聖福音經の讀、







はなんぢにきす。  
爾 歸

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聴くべし、<sup>しゅ</sup> 主は左の <sup>たとえ</sup> 譬 を <sup>もう</sup> 設けて曰えり、<sup>いと</sup> 或 <sup>ひと</sup> 富める人 <sup>たはた</sup> に <sup>よ</sup> 田畝 <sup>みの</sup> の善く <sup>あり</sup> 實れるあり、

<sup>かれみづか</sup> 彼 <sup>はか</sup> 自ら <sup>い</sup> 忖りて曰えり、<sup>われなに</sup> 我 <sup>な</sup> 何を <sup>な</sup> 爲さんか、<sup>けだしわ</sup> 蓋 <sup>さくもつ</sup> 我が <sup>おさ</sup> 作物 <sup>ところ</sup> を <sup>またい</sup> 藏むべき <sup>なし</sup> 處 <sup>あり</sup> なし。又曰えり、

<sup>われか</sup> 我 <sup>な</sup> 斯く <sup>わ</sup> 爲さん、<sup>くら</sup> 我が <sup>こぼ</sup> 倉 <sup>さら</sup> を <sup>おおい</sup> 毀ちて、<sup>もの</sup> 更に <sup>た</sup> 大 <sup>こ</sup> なる <sup>うち</sup> 者 <sup>わ</sup> を <sup>ことごと</sup> 建て、<sup>こくもつ</sup> 此 <sup>あり</sup> の <sup>なし</sup> 中 <sup>あり</sup> に <sup>あり</sup> 我が <sup>あり</sup> 悉 <sup>あり</sup> くの <sup>あり</sup> 穀 <sup>あり</sup> 物 <sup>あり</sup> と

<sup>たから</sup> 貨物 <sup>あつ</sup> と <sup>わ</sup> を <sup>たましい</sup> 聚めて、<sup>い</sup> 我が <sup>たましい</sup> 靈 <sup>なんぢ</sup> に <sup>たねん</sup> 謂わん、<sup>ため</sup> 靈 <sup>たくわ</sup> よ、<sup>おお</sup> 爾 <sup>たから</sup> には <sup>あり</sup> 多年 <sup>あり</sup> の <sup>あり</sup> 爲 <sup>あり</sup> に <sup>あり</sup> 蓄 <sup>あり</sup> えた <sup>あり</sup> る <sup>あり</sup> 多 <sup>あり</sup> くの <sup>あり</sup> 貨 <sup>あり</sup> 物 <sup>あり</sup> と

<sup>やす</sup> あり、<sup>くら</sup> 息 <sup>の</sup> み、<sup>たのし</sup> 食 <sup>しか</sup> い、<sup>かみ</sup> 飲 <sup>かれ</sup> み、<sup>い</sup> 樂 <sup>むち</sup> め <sup>もの</sup> と。然 <sup>こんや</sup> れ <sup>なんぢ</sup> ども <sup>あり</sup> 神 <sup>あり</sup> は <sup>あり</sup> 彼 <sup>あり</sup> に <sup>あり</sup> 謂 <sup>あり</sup> えり、<sup>あり</sup> 無 <sup>あり</sup> 知 <sup>あり</sup> なる <sup>あり</sup> 者 <sup>あり</sup> よ、<sup>あり</sup> 今 <sup>あり</sup> 夜 <sup>あり</sup> 爾 <sup>あり</sup> の

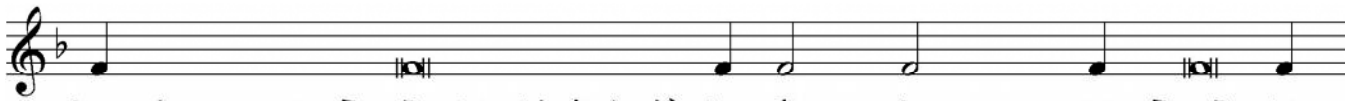
<sup>たましい</sup> 靈 <sup>なんぢ</sup> を <sup>もと</sup> 爾 <sup>しか</sup> より <sup>なんぢ</sup> 索 <sup>そな</sup> めん、<sup>ところ</sup> 然 <sup>もの</sup> ら <sup>だれ</sup> ば <sup>き</sup> 爾 <sup>およ</sup> が <sup>おのれ</sup> 備 <sup>ため</sup> えし <sup>あり</sup> 所 <sup>あり</sup> の <sup>あり</sup> 者 <sup>あり</sup> は <sup>あり</sup> 誰 <sup>あり</sup> に <sup>あり</sup> 歸 <sup>あり</sup> せん <sup>あり</sup> か。凡 <sup>あり</sup> そ <sup>あり</sup> 己 <sup>あり</sup> の <sup>あり</sup> 爲 <sup>あり</sup> に

<sup>たから</sup> 財 <sup>つ</sup> を <sup>かみ</sup> 積 <sup>おい</sup> み、<sup>と</sup> 神 <sup>もの</sup> に <sup>か</sup> 於 <sup>ごと</sup> て <sup>あり</sup> 富 <sup>あり</sup> ま <sup>あり</sup> ざる <sup>あり</sup> 者 <sup>あり</sup> は <sup>あり</sup> 是 <sup>あり</sup> くの <sup>あり</sup> 如 <sup>あり</sup> し。

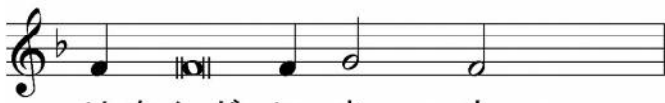
\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスは一つの譬を語られた、「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』』と思ひめぐらして言った、『どうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ』。すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」。

\*\*\*\*\*



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮



はなんぢにきす。  
爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金ロイオアン) へ